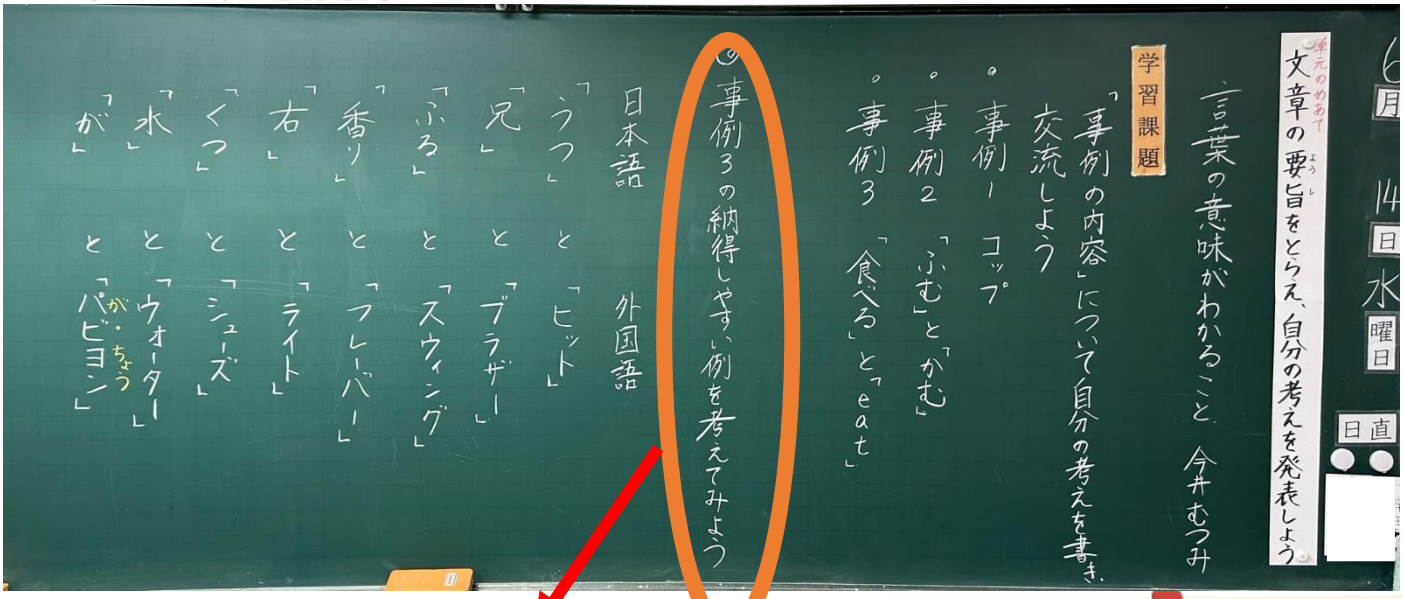
５年生研究授業まとめ

2023.6.14 学力向上部



「わからないベース」の授業

○「わかるベース」→「筆者の工夫を見つけよう」＝「筆者の文章はいい」
　＝「筆者の文章が正しい」＝「それがわからない自分(子ども)がわかる」
となると、「わからない」は子どものせいになる。学びのシャッターが下りる。
○「わからないベース」→「自分にとって理解しにくかったところを見つけよう」＝「わからなかったところがあって当たり前」＝「文章の良し悪しの問題」→「どうしたらわかりやすくなるか考えていこう」スタートのハードルが下がる。
☆「わからないベース」の授業とは、「わからなさ」から授業の問いを始める展開のこと。「わからなさ」を共有すると子どもたちは安心する。そうすることで、「わかるために何がいるかな？」とわからなさを解決していく授業になる。

思考ツール・認知ツール

思考ツールには力がある。が、学習課題に適しているかは見極めが必要。子どもたちにもいろいろと試させて使わせていく。指導案にも思考ツールの使用がどの段階であるかを書いていく。

「何のため」発問

筆者の書く事例はなんのためか？
→読み手に自分の考えをわかってほしい、文から学んだことを生かしてほしいという願いが込められている。筆者の「主張」や「願い」とつなげて読むことを忘れない。また、筆者のプロフィール(職業など)ともつなげると願いにつながりやすい。

「読み手」と「書き手」の立場

「わからない」は「読み手」の立場。そこから「例を書き換える」「順序を入れ替える」「文章を付け足す、削る」などの活動に展開すると「書き手」の立場を追体験することになる。そうするからこそ筆者に寄り添える。そして、「筆者の書きぶりも悪くないな」という選択肢が増える。選択肢がないといいものは選べない(広げる)。一回広げる時間がないと深まらない(ふかぼる)。これが筆者との対話となり、「批判的に読む」ことの重要なプロセスとなる。
Ex)富士山を横から見るか、上から見るか…。横から見た富士山を正解だと思わず、上からの景色も知った上でどっちがいいか？

「指導言について」

教師の発言である「指導言」が子どもの思考の加速を促していく。しかし、それがぶれると子どもたちが混乱してしまう。
今回は

「**自分にとって**わかりにくいところ。わかりやすいところ」(自分ベース)と

「筆者の文章が**伝わりやすくなる**には。」(評価の一般化ベース)とは立場が違うので注意が必要。指導言はぶれないように事前に確認！